『拾遺和歌集』恋歌の配置構成

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 倉田, 実 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/7016

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

大妻国文　第52号　二〇二一年三月

『拾遺和歌集』恋歌の配置構成

倉田　実

はじめに

『拾遺和歌集』（以下、歌集類の「和歌」は省略し、『拾遺集』のように略記する）は、巻十一から十五までに恋歌が五巻に分けて配置されている。先蹤となる『古今集』の恋歌五巻は、恋の始まりから終わりまでが、段階を追って配置されており、『拾遺集』もこの路線を踏襲しているとみられている。『拾遺集』の恋歌の展開については、現在のところ、だいぶ以前のものになるが、次のような整理がまだ有効であろう。

恋一は未だ逢う以前の段階の恋で、秘められたものが次第に顕在化して行く過程を、恋二は逢ったばかりの段階の恋で、いつか評判が立ち、逢ってますますつのる思い、暁の別れがわびしく、しきりに暮が待たれる状態を、恋三はやや飽きが来た段階の恋で、来ぬ人を待って独り寝の状態が多くなる事情を、恋四はいよいよ忘れられかけた段階の恋で、誓い合った頃を思い起こしている様子を、恋五はもはや絶望的な段階の恋で、自分のことをすっかり飽きて忘れてしまった相手をうらむ一方ではわずかな期待を寄せる状況を各々の歌が詠みあげているのである。(1)

恋一から恋五に至る恋歌の配置を的確にまとめていよう。この小稿では、こうした見方を踏まえたうえで、各巻における和歌の配置のされ方を今一度考えてみることにしたい。右とは違った説明の仕方が可能だと思われる。方法としては、恋の進行段階の指標となる歌句を明確にし、また、多様な歌語のありかたに着目していくことになる。なお、多様な歌語の使用については、次のような指摘も首肯されよう。

特に恋の部の配列に認められる大きな特色の一つは、隣り合う二首あるいは三首の歌が、単に歌の内容が同種のものであるだけでなく、その歌の用語などにおいても、密接に関連した関係に構成されていることである。[2]

すでに歌語の緊密な連携という点は、定説化しており、今更なる感もあるが、この小稿もその驥尾に付くことになる。

一　恋の進行段階を表わす語彙

最初に、恋の進行段階を表わす語彙について確認することから始めたい。恋には、その始まりから成就するまでに段階があり、さらに破綻していくまでの進行にかかわる、固有の多様な語彙を認めることができる。それらのうちで、ここで着目するのは、「初めて…をする」意となる、「…初め」という表現の仕方である。[3] この言い方は、今日でも、書初め、出初め、食い初めなどという形で継続的に使用されている。物事がなされた最初を明確して把握する仕方であり、恋の進行においても、多様な「…初め」が使用されて、恋の段階を示す指標的な役割を担っている。それは、和歌においても多様に使用されており、八代集にもそれなりに認められるので、そこでの用例を整理しながら確認していきたい。なお、「初め」は、色にかかわる文脈では、「染め」と掛詞になるので、以下は「…そめ」と表記することにする。

まず、恋のはじまりは、異姓に思いを寄せ、恋心を抱く段階である。この初期の段階は、「思ひそめ」「恋ひそめ」という言い方で提示される。特定の異姓を、恋の相手として初めて意識した段階である。

この意識が昂じてくると、次は異姓に恋心を打ち明ける「言ひそめ」の段階になる。「言ひそめ」には、契りを交わす意はなく、初めて懸想文を贈る意であり、口頭であることを要しない。「文そめ」という言い方が分かり易いだろう。初めてのラブレターである。「言う」に敬意が入れば「申しそめ」に、「言う」のは知らせるためなので「知らせそめ」も類句となる。「言ひそめ」の歌は、「思ひそめ」「恋ひそめ」したことを詠むことになる。

次は、求婚する女性宅を訪問し、簀子に坐って挨拶をする「居そめ」という作法になる。室内に入ることは許されず、求婚の意向を真摯に訴えるだけである。ただし、この用例は和歌集にはなく、『蜻蛉日記』下巻、藤原遠度の養女求婚に際して一例だけ認められるもので、この作法はない場合が多いようである。「言ひそめ」「居そめ」が終わり、両者の合意が成立すると、実際に結ばれる段取りとなり、ここにも多様な言い方があった。

通い婚の時代なので、通うことからする「通ひそめ」「まかりそめ」という形で、結婚や恋愛の成就を言うことになる。結婚前に通いはない。恋の成就・結婚は、通ってきた男が女性と初めて対面することになるので、「見そめ」「見慣れそめ」とされたり、「逢ひそめ」「逢ひ見そめ」とされたりする。この場合、見るとされる主体は男であり、互いに見合う意ではない。逢うとされる場合は、男女どちらも主体になりえる。「逢ひ」の形は、染料の「藍」が掛けられることもあり、「初め」と「染め」の掛詞が使用される。

また、恋の成就を実際的にいえば、「寝そめ」になる。契りを結ぶことからは、「契りそめ」「結びそめ」ともされる。そして、一夜を共にして朝を迎えれば、初めて女の家から自邸に帰ることになるので、「帰りそめ」ということになる。恋の成就・結婚は、文脈に応じて多様な指示の仕方があったのである。

三日間の通いが終わり、これ以降、女の家に住むようになれば「住みそめ」になり、また、互いに馴染むことになるので、「懐きそめ」とされることもある。

このまま愛情が継続すれば問題はないが、そうはいかないのが男女の仲であった。男が他の女に思いを寄せて、元の女

との隔てが生じると「隔てそめ」になり、隔てられた側は「嘆きそめ」になる。一回的な用法としては、「心からうきたる舟に乗りそめてひと日も浪に濡れぬ日ぞなき」（『後撰集』恋二・七七九・小町）と詠まれた「（うきたる舟に）乗りそめ」という形もある。「うき」は「浮き」と「憂き」の掛詞で、「浮きたる舟」は男の比喩。「濡れ」は、波と共に涙に濡れることである。「乗りそめ」は、見そめの意と、嘆きそめの意を掛けるのであろう。恋の成就は、恋の破綻の端緒なのでもあった。

「隔てそめ」「嘆きそめ」は、解消されることもあろうが、それは難しいことである。その状態が継続し、破綻が意識されると、恋のはじめの段階にもどって「思ひそめ」「契りそめ」を後悔することになる。恋のはじめは記念されるとともに、後悔される基点なのであった。「思ひそめ」などは両義的に機能したのでる。

以上のような恋の進展にかかわる多様な語彙が八代集の和歌の用例として認められるのである。これらの語彙は、恋にかかわる歌語として認定できよう。そして、詞書には、「…初め」の形の他に、「はじめて…する」「はじめたる…」などという指示の仕方も併用されている。すなわち、「女のもとにはじめてつかはしける」「男のはじめて女のもとにまかりて」、あるいは「はじめたる恋」「言ひはじめ侍りける」などという言い方である。こうした語彙によって、恋の新たなステージを言わば記念日的に把握したのであった。

したがって、歌語と、これらの散文的な語彙に着目することで、恋の段階的様相が把握できるのであり、『拾遺集』の恋歌の把握にも有効であると思われる。それは、これらの語彙が、どの歌集にも平均して使用されることはないからであり、偏在するからである。例えば、八代集で詞書を除くと、『古今集』には「思ひそめ」「見なれそめ」「逢ひ見そめ」だけ、『後拾遺集』には「思ひそめ」「帰りそめ」だけ、『金葉集』には「思ひそめ」「文そめ」だけ、『詞花集』には「逢ひそめ」だけ、『新古今集』では「思ひそめ」だけしか使用されないのである。

この一方、多用されるのが『後撰集』『拾遺集』『千載集』であった。『後撰集』には「思ひそめ」「言ひそめ」「見そめ」

「住みそめ」「懐きそめ」「嘆きそめ」「乗りそめ」の七種が、『拾遺集』では「思ひそめ」「知らせそめ」「見そめ」「寝そめ」「結びそめ」「隔てそめ」の六種、『千載集』では「思ひそめ」「恋ひそめ」「知らせそめ」「通ひそめ」「契りそめ」「結びそめ」の六種が認められるのである。ただし、詞書の用例も合わせると、この数値は変わってくるが、とりあえずは、「…そめ」の使用傾向の目安となろう。『拾遺集』のこうした歌語の多用は、『後撰集』を受けていよう。『拾遺抄』には「…そめ」の用例はない。そして、『千載集』は、この両集を受けたことになる。

こうした傾向もあることであり、以下、この観点から恋歌の各巻をみていくことにしたい。結論的に言えば、恋一は「思ひそめ」と「言ひそめ」の段階、恋二は「まかりそめ」の段階で、早くも「むすびそめ」「寝そめ」の後悔の念がきざし、恋三は「…そめ」の用例を離れて「逢えない恋」の場合、恋四は用例として一例しかないが、「隔てそめ」の段階、恋五は関係が破綻し、「思ひそめ」を後悔する段階となる。「…そめ」の形に着目することで『拾遺集』恋歌の特質を指摘できるようであり、以下、具体的に、歌語の用法と共に検討していくことにしたい。

二　恋一――「思ひそめ」と「言ひそめ」

巻十一、恋一は、「思ひそめ」と「言ひそめ」の段階の恋歌で配置されており、「見そめ」、すなわち逢瀬に到る恋はない。このこととは巻頭で暗示されている。

天暦御時歌合

恋すてふ我が名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしか（恋一・六二一・壬生忠見）

しのぶれど色に出でにけり我が恋は物や思ふと人の問ふまで（恋一・六二二・平兼盛）

題知らず

色ならば移るばかりもそめてまし思ふ心を知る人のなさ（恋一・六二三・紀貫之）

女のもとに初めて遣はしける

忍ぶるも誰ゆへならぬものなれば今は何かは君に隔てむ（恋一・六二四・平公誠）

題知らず

嘆きあまりつゐに色にぞ出でぬべき言はぬを人の知らばこそあらめ（恋一・六二五）

巻頭二首は、晴儀歌合の典型とされる、天徳四年（九六〇）「内裏歌合」の恋二十番で番われた両歌である。周知のように、右方の兼盛歌が勝となったため、負となった左方の忠見は悶死したとの説話が生じている（『沙石集』五）。この歌合の歌が巻頭に据えられたのは、「思ひそめ」の歌だったからであろう。「思ひそめ」は、恋のもっとも初期の段階であった。歌は、人に知られずに「思ひそめ」たのに、恋の浮名は早くも立ってしまったとの嘆きが詠まれている。恋の初めの歌として、恋部の冒頭に配置するのに最適であったのである。兼盛の歌も「物や思ふ」と人が問い尋ねたというのは、「思ひそめ」したのかと聞かれた意にもなる。三首目の貫之歌も「思ふ」と「そめ」は分離しているが、「思ひそめ」の歌と見なせよう。この「そめ」は「色」の使用があるので「染め」であり、下の「思ふ」とかかわって「初め」の意も働くと見られる。「思ひそめ」した心を分かってくれないと嘆くのである。恋一冒頭三首は、「思ひそめ」の歌なのであった。

四首目の六二四番歌になると、詞書に「女のもとに初めて遣はしける」とあるので、「言ひそめ」の歌となっている。歌は、「忍ぶ恋の思いをするのは浮名を恐れる我が身のためだったので、忍びきれなくなった今は、どうしてあなたに恋心を隔て隠していられようか」と詠んでいる。恋心を初めて告白する「言ひそめ」の歌となっているのは確実である。

五首目は独詠歌とも、贈歌ともとれるようである。贈歌とすれば、歌句の「人」は相手の女性を暗示して、「言ひそめ」したことになる。歌は、「忍ぶ恋を嘆くあまり、ついには態度に現れてしまいそうだ。口に出して言わない思いを、あなたが知ってくれるならば、このままでいられるのだが」と詠まれたことになろう。

恋一巻頭は「思ひそめ」「言ひそめ」の恋の段階の歌になっていた。恋のごく初期の歌なのである。さらに「言ひそめ」の歌は、この後にも続いている。この点を確認する前に、『拾遺集』が特に留意したと思われる、歌語を連携させるありようを確認しておきたい。『拾遺集』は、一首のうちに歌語を重層的に使用した歌を撰び、後続する歌と緊密な連携をはかる方法をとっている。こうして、歌群としてのまとまりを形成させている。(4) こうしたありようを、右の引用部で確認しておきたい。

右の五首には、詞書を含めて四つの歌語や歌句の連携が認められる。それを簡略に提示すれば、次のようになる。

拾遺集・六二一　思ひ初め　人知れず
拾遺集・六二二　忍ぶれ　色に出で
拾遺集・六二三　初め…思ふ　知る人のなき　色ならば
拾遺集・六二四　初めて遣はし　忍ぶる
拾遺集・六二五　人の知らば　色にぞ出で

右には「思ひそめ」「言ひそめ」系、「人知れず」系、「忍ぶ」系、「色に出づ」系の歌句それぞれが、互いに重層的に呼応している様相が見て取れよう。ちなみに、後続する六二六番歌は「逢ふことをまつにて年の経ぬるかな身は住の江に生ひぬものゆへ」であり、六二五番歌とは連携は見られない。この歌では逢瀬を待つ身に、住の江の松を重ねることが趣向となっている。冒頭五首と別の主題の歌となろう。冒頭は五首のあいだで歌句が重層的に呼応するようにさせて歌群を構成しているのである。こうした歌句の呼応は、そもそも『古今集』で認められるものであった。恋一から引用する。すべて題知らずである。

古今集・五二七　涙河枕ながるるうきねには夢もさだかに見えずぞありける
古今集・五二八　恋すればわが身は影となりにけりさりとて人にそはぬものゆゑ

古今集・五二九　篝火にあらぬわが身のなぞもかく涙の河にうきて燃ゆらむ
古今集・五三〇　かがり火の影となる身のわびしきはなかれてしたに燃ゆるなりけり
古今集・五三一　早き瀬にみるめおひせばわが袖の涙の河に植ゑましものを

この連続して置かれた五首を先のように整理すると次のようになる。なお、五二七番歌で詠まれた「夢」は、五二四番歌からの継続使用となっている。

古今集・五二七　涙河　流るる・泣かるる　浮き
古今集・五二八　身は影となり
古今集・五二九　涙の河　浮き　篝火　燃ゆ
古今集・五三〇　流れて・泣かれて　影となる身　篝火　燃ゆる
古今集・五三一　涙の河

歌句の呼応がやはり見てとれよう。しかし、注意してみると、多様な歌句がありながら、これらは「涙河」とその縁語「流る」「浮き」、「篝火」とその縁語「影」「燃ゆ」というように、縁語の呼応であった。しかし、『拾遺集』では、縁語の呼応という位相ではない。『拾遺集』では歌句の呼応を縁語に頼らずにより重層的にしていたことになる。こうした歌群が多く認められるのが『拾遺集』の特質なのである。次の「思ひそめ」「言ひそめ」歌群にも同じ呼応が認められよう。

見ぬ人の恋しきやなぞおぼつかな誰とか知らむ夢に見ゆとも（恋一・六二九）
夢よりぞ恋しき人を見そめつる今は逢はする人もあらなん（恋一・六三〇）
かくてのみありその浦の浜千鳥よそになきつゝ恋ひやわたらむ（恋一・六三一）
よそにのみ見てやは恋ひむ紅の末摘花の色に出でずは（恋一・六三二）

まさただが女に言ひはじめ侍ける、侍従に侍ける時

身にしみて思ふ心の年経ればつゐに色にも出でぬべきかな（恋一・六三三・藤原敦忠）

侍従に侍りける時、女に初めて遣はしける

いかでかは知らせそむべき人知れず思ふ心の色に出でずは（恋一・六三四・源邦正）

いかでかはかく思ふてふ事をだに人づてならで君に知らせむ（恋一・六三五・敦忠）

ここも先のような整理を歌だけでするとと次のようになる。

拾遺集・六二九　夢に見ゆ　恋しき

拾遺集・六三〇　夢…見そめ　恋しき

拾遺集・六三一　よそに…恋ひ

拾遺集・六三二　よそに…恋ひ　色に出でずば

拾遺集・六三三　思ふ心　色にも出でぬ

拾遺集・六三四　いかでかは　思ふ心　色に出でずば　知らせそむ

拾遺集・六三五　いかでかは　思ふ　知らせむ

最初の二首は、六二九の「夢に見ゆ」と六三〇の「夢…見そめ」、及び「恋しき」が共通して呼応している。恋しき人との夢での逢瀬の歌となる。六三〇に「見そめ」があっても、夢のものなので、実際の逢瀬に至ってはいない。「見そめ」は、逢うことになじむ意ではなく、初めて契る意であった。

この二首とも男女関係が成立しておらず、次の二首（六三一・六三二）の「よそに…恋ひ」と意味的に同調してさらに呼応していくと見られる。そして、六三二の結句「色に出でずは」は、次の六三三の「色にも出でぬべきかな」にかかわり、さらに六三四の結句と同じになり、一首を挟んで結句揃いになっている。

この六三三は詞書に「女に言ひはじめ」とあり、次の六三四にも「女に初めて遣はしける」とあるので、共に「言ひそ

め」になる。「言ひそめ」は、思いをはじめて知らせる意であり、六三四には「知らせそめ」が使われている。そして、次の六三五の「知らせむ」に呼応していく。また、六三三と六三四は「思ふ心」を共通にし、これとは別に六三四と六三五には、「いかでかは」の初句揃えもあって緊密に呼応している。

総じて、右の箇所は、「見そめ」までいかない「言ひそめ」の段階の恋になっており、歌句が重層的に使用されて、歌々が緊密に呼応し連携する歌群になっていると言えよう。

恋一はこうした特異な歌群に続けて、二首から数首にわたって同一歌語を使用した歌を並列させて配置する方法を採っている。歌の引用は省略するが、例えば、六七二～六七四の三首は「人知れぬ」の初句揃えにして並置されている。六七八～六八一の四首は「逢ふ事」の初句揃えで、次の六八二番歌に「逢ふ」、六八三番歌に「逢ふ事」、六八四番歌に「逢ふ」があるので七首の「逢ふ」歌群とみることができる。ただし、いずれの「逢ふ」は、「待つ」もので「いつとも知ら」れず、「年月」が経っても実現されないものになっている。「逢ひそめ」「見そめ」は実現できないのであった。

以上、恋一は、「思ひそめ」て、「言ひそめ」るまでの歌で配置構成されていたことを確認した。そして、縁語関係のない歌語を重層的に連携させて、緊密に歌群を配置し、連携させる『拾遺集』の特質も確認したことになる。

三　恋二――「まかりそめ」と「結びそめ」「寝そめ」の後悔

恋二は前半（七四五番歌まで）と後半に二分されていよう。前半は、「なき名立つ」恋と、「言ひそめ」より進んだ「まかりそめ」「結びそめ」の段階の歌が主に配置されている。逢瀬が叶った段階の歌である。後半は、その後に早くも訪れる齟齬で、「寝そめ」を後悔する歌の配置となっている。後半は二首間での歌語の共有が認められるだけで特に歌群と言うべきものはないようである。

前半は特定の歌語や主題によった七つの歌群からなると見られる。

(1) 名立つ　(六九八～七〇七)
(2) 夢の逢瀬　(七〇八～七〇九)
(3) 逢瀬　(七一〇～七一三)
(4) 後朝　(七一四～七二七)
(5) まさる恋　(七二七～七三八)
(6) 松　(七三九～七四三)
(7) 経る恋　(七四四～七四五)

(1)と(2)は、逢瀬以前である。(1)の「名立つ」は、かかわりのない人との無実の噂が立つ、「無き名立つ」意と、逢瀬に到る前に、その人との噂が先行する、「浮き名立つ」意でも使用されている。(2)は夢の中でのみ可能な逢瀬の歌である。(3)になって逢瀬が叶い、四首とも「逢ひ見て」が使用されている。実質は「逢ひそめ」の歌と見てもよいようである。一首だけ引用しておく。

逢ひ見ての後の心にくらぶれば昔は物も思はざりけり（恋二・七一〇・藤原敦忠）

この「逢ひ見て」は「逢ひ見そめ」と見なすことができよう。こうした逢瀬を詠む(3)歌群は、(4)の後朝の歌群に連続し、ここに詞書だが、「はじめてまかり」「まかりそめ」を認めることができる。

はじめて女の許にまかりて、あしたに遣はしける
逢ふ事を待ちし月日のほどよりも今日の暮こそ久しかりけれ（恋二・七一四・大中臣能宣）

本院の五の君の許にはじめてまかりて、あしたに
朝まだき露分け来つる衣手のひるまばかりに恋しきやなぞ（恋二・七二〇・平行時）

女の許にまかりそめて

日のうちに物を二度思ふかなとく明けぬると遅く暮るると（恋二・七二三・大江為基）

右三首とも「まかりそめ」があった時の、後朝の歌の贈歌になる。「まかりそめ」には、初めて出かけていくことを許された思いが反映するのである。後朝の歌は、女の家で別れる時の贈答歌の場合と、男が帰宅した後に交わす文使による贈答歌の場合がある。しかし、どちらも同じ詠風になるので、いづれの場合かは決めがたい例も多い。右の一首目は「あしたに遣はしける」とあるので帰宅後になる。二首目の「朝まだき露分け来つる」は帰宅の折を言い、三首目も暮れないのをもどかしく思うとされるので、帰宅後の感慨になる。帰宅すると、暮れるのが待ち遠しいのである。「まかりそめ」をして一夜を共にし、別れた朝は、また「まかる」ことを思うのである。「まかる」を「通ふ」に言い換えても事情は同じである。

続く(5)「まさる恋」は省略して、(6)「松」になると、早くも男女の仲に齟齬が生じているようである。ここは一首のみ引用する。この歌以前は「住吉の松」であったが、ここでは「岩代の松」になっている。

ある男の松を結びて遣はしたりければ

何せむに結びそめけん岩代のまつは久しき物と知る知る（恋二・七四二）

これは「結びそめ」を後悔する女歌になる。「まつ」が掛詞になっており、「岩代の松」が「待つは久しき」を導いている。「あの人の訪れを待つのは、松の寿命のように久しいものと知りながら、どうして「結びそめ」をしてしまったのだろう」と詠まれている。「結びそめ」の喜びではなく、それを後悔するものとなっている。恋二後半の初めにも、似たような歌がある。

杉板もてふける板間のあはざらば如何せんとか我が寝そめけん（恋二・七四六）

歌は、「杉板でもって葺いた屋根の板の間が合わなかったならば、どうしようと思うように、あの人が逢わなくなった

ら、どうするつもりで私は「寝そめ」をしてしまったのであろう」と詠まれている。共寝してしまったことを後悔しているのである。この後悔の度合いは、七四二番歌よりも深刻かもしれない。この点はともかく、恋二で早くも「結びそめ」や「寝そめ」を後悔する用例が置かれているのである。

恋二の「…そめ」の用例はこれだけである。しかし、以上のような用例でも、「…そめ」表現が、恋二の段階に応じた指標となる次第が指摘できることになろう。「まかりそめ」があって恋は成就したが、その恋に早くも齟齬が生じて、「結びそめ」「寝初め」をしたことを後悔するに至る歌が配置されたのである。

四　恋三

恋三には、「…そめ」の用例は不在である。恋の進行する段階としては、すでに引用したように、「恋三はやや飽きが来た段階の恋で、来ぬ人を待って独り寝の状態が多くなる事情」が基本となっていると言える。そして、恋三は、景物が歌群の構成要素となっていて、それに応じた恋歌が配置されている。恋二前半の歌群の様相と違っていよう。恋三は、景物を示す歌語に着目するのが順当であり、詞書も恋一・二に比べて、その比重は小さいと言えよう。

詞書に、恋の段階が明示されるのは、次の二首だけである。恋一・二との差異がここにもある。

今は訪はじと言ひ侍ける女のもとに遣はしける
忘れなん今は訪はじと思つつ寝る夜しもこそ夢に見えけれ（恋三・八〇〇）

絶えて年ごろになりにける女の許にまかりて、雪の降り侍りければ
み吉野の雪にこもれる山人もふる道とめて音をや泣くらん（恋三・八四七・源景明）

二首とも夜離れが続いての詠歌である。「今は訪はじ」「絶えて年ごろになり」とあるように、これはまさに「来ぬ人を

待って独り寝の状態が多くなる事情」が示されている。恋三は、詞書に依拠する比重は小さく、それよりも、新たな趣向をもくろんでいるようである。

恋三については、「歌語の関連が密接な拾遺集の中でも際立った構造を示している巻である」との小町谷氏の指摘[5]が首肯されている。氏は、恋三の構造を次のように把握していた。番号を付けて引用する。

①「「山」を詠み込み、来ぬ人を待ち、独り寝をする主題の歌」（七七七～七八一）
②「月を景物とした歌」（七八二～七九六。内七八三～七八五は「三句に「雲隠れ」を置く」）
③「夜を詠んだ歌」（七九七～八一〇）
④「夢の歌」（八〇八～八一〇）
⑤「春を景にした歌」（八一〇～八一九）
⑥「夏を景にした歌」（八二〇～八三二）
⑦「秋を景にした歌」（八三三～八四二）
⑧「この前後から、冬を景とする歌」（八四三～八四七）
⑨「この巻の総括的な歌」（八四八）

恋の段階よりも、景物や時節に着目していることが知られよう。こうした歌群の配置が恋三の眼目であろう。①の「山」には、いずれも枕詞「あしひきの」が付いている。恋三冒頭に「あしひきの山」を詠み込んだ歌を、なぜ配置したのかは分かりにくい。『拾遺抄』の恋部にも山歌群（二九〇～二九七）があるが、この歌群の歌でこの①に置かれた歌は一首（抄二九六、集七八一）のみであり、『拾遺集』なりの意図があるのであろう。

山歌群の意味づけに困るが、恋三は、景物や時節に応じた歌群で構成されているのは確かである。ここに『古今集』になかった恋歌の趣向が認められるのである。なお、『拾遺抄』恋部には、山歌群の他に、月歌群（三六一～三六七）と夢

歌群（二六二～二六六）も認められる。『拾遺抄』の影響も見過ごせないが、ここでは触れない。

さて、右の九群での整理については、微調整できる点があると思われる。『拾遺集』の歌の配列は同一歌語の連続使用が特徴となっており、他の歌語に転じる時には、両方の歌語を一首に詠み込んだ歌を配置することが多かった。この前半部もそうであり、ここは次のように簡略化して、歌番号を重複させる修正が可能であろう。

1「山を詠んだ歌」[七七七～七八二]
2「月を詠んだ歌」[七八二～七九六]
3「夜を詠んだ歌」[七九六～八一〇]
4「春を詠んだ歌」[八一〇～八一九]

七八二・七九六・八一〇番歌を重複させてみた。これは次に引用するように、七八二番歌に山と月が詠まれ、七九六番歌に月と夜が詠まれ、八一〇番歌に夜（宵）と春が詠まれているからである。ここには、夢も詠まれている。二つの歌群を連結させる工夫となっている。

あしひきの山より出づる月待つと人には言ひて君をこそ待て（恋三・七八二・柿本人麿）
ことならば闇にぞあらまし秋の夜のなぞ月影の人頼めなる（恋三・七九六）
いにしへをいかでかとのみ思ふ身に今夜の夢を春になさばや（恋三・八一〇・源計子）

この例歌に見られるように、『拾遺集』は、前後の歌群の二つの歌語が、重複して詠まれた歌を間に挟むようにする配置にこだわっていることが指摘できよう。また、一つの歌群の内部に、小歌群を配置することもあり、「夢の歌」は、「夜の歌」歌群内の小歌群と見なせるのである。他の歌群内にも小歌群が認められるので、確認しておきたい。なお、春と夏、夏と秋、秋と冬の間には、こうした配置は見られない。

1「山を詠んだ歌」　独り寝

2「月を詠んだ歌」　雲隠れ

3「夜を詠んだ歌」　呉竹・夕占・夢

恋三の後半、時節を詠んだ歌群に移ろう。八一〇番歌以降は、恋歌を四季歌と重ねる趣向の試みとなっている。「春の恋を詠んだ歌」などとした方が妥当かもしれない。それぞれに四季歌の歌語を二首続けて同一にする配置を基本としている。これが小歌群となる。二首続けて使用される景物だけを取り出すと次のようになる。

4「春を詠んだ歌」　春の田・柳糸・霞

5「夏を詠んだ歌」　時鳥・夏草・撫子

6「秋を詠んだ歌」　白露・秋の田・秋萩

7「冬を詠んだ歌」　雪

こうした小歌群を含んだ1～7の歌群を受けて、巻末歌は「この巻の総括的な歌」とされ、次のようにまとめられている。

あたかも、訪れぬ人を待つ間に、山から月が出て、夜も更けて寝ると、夢を見て、夢の中で四季が循環し、目が覚めてから、（巻末歌で―筆者注）待つ恋のむなしさを実感して、諦めるというような、物語性さえも感じさせるものがあるのである。[6]

要点は「夢の中で四季が循環し」との把握と「物語性」の指摘であろう。前者は何とも言えないが、後者は、例えば『伊勢集』三四～五一番歌の一八首は、物語屏風歌になっており、その影響を考えれば、屏風歌を多く採用している『拾遺集』ではあり得るかもしれない。

以上、恋三の景物や時節に応じた歌群構成を確認したことになる。

五　恋四―隔てそめ

恋四には、「…そめ」の形は、「隔てそめ」一例だけである。この用例から確認したい。

年を経て信明の朝臣まうで来たりければ、簾越しに据へて物語し侍けるに、いかがありけん

内外なく馴れもしなまし玉簾誰年月を隔てそめけん（恋四・八九八・中務）

詞書は末尾が朧化されているが、通いが一年以上なかった信明が訪れて来たので、簾越しに坐らせて話をしていると、どうしたことか内に入ろうとしたので、拒否したということになろう。「簾越し」は他人行儀のもてなし方であり、信明は復縁を迫ったのである。歌は、「内と外との隔てなく馴れ親しんだでしょうに。二人の仲は、誰が年月を「隔てそめ」したのでしょうか」と詠まれている。信明への恨みをいう訳だが、すでに中務自身に「隔てそめ」が意識されている。この意識は、「結びそめ」や「寝そめ」を後悔するよりも進んだ段階となろう。この「隔てそめ」の意識こそが、恋四の世界を基本的に構成していると言えよう。

ただし、あくまでも基本的であり、恋四には、思ひそめ・通ひそめしたころの歌も収載されている。

元輔が婿になりて朝に

時の間も心は空になるものをいかで過ぐしし昔なるらむ（恋四・八五〇・藤原実方）

恋ひ〳〵て後も逢はむと慰むる心しなくは命あらめや（恋四・八七三・柿本人麿）

いさやまだ恋てふ事も知らなくにこやそなるらん寝こそ寝られね（恋四・八九六）

八五〇は詞書で明瞭なように「通ひそめ」した後朝の歌である。八七三はいつか逢えるだろうと自らの恋情を慰める歌で、八九六は初恋に気づいた歌となり、この二者は「恋ひそめ」の歌とも言えよう。恋四は、「恋ひそめ」の段階から、

「隔てそめ」になる経緯を対象化していると言えるようである。

こうした趣向が認められるとともに、歌枕を恋の歌として詠み込んだ歌群を配置する趣向も指摘できる。八五二～八九二番歌が、途中に歌枕不在の歌もあるものの、ここが恋歌の歌枕歌群となりそうである。

一条摂政、内にてはびんなし、里に出でよと言ひ侍りければ、人もなき所にて待ち侍りけるに、まうで来ざりければ

いかにして今日を暮らさむこゆるぎのいそぎ出でてもかひなかりけり（恋四・八五二・小弐命婦）

我が恋のあらはに見ゆるものならば都の富士と言はれなましを（恋四・八九二）

八五二は、相模国の「こゆるぎの磯」、八九二は駿河国ではなく、仮想の「都の富士」が詠まれている。この両歌の間を歌枕歌群と見たいのである。問題は、歌枕不在の歌が混じってしまうことである。しかし、いくつかの歌に関しては、解決できる場合もある。歌枕が不在であっても、前歌の歌枕を引き継いでいると判断できる場合があるからである。

住吉のあら人神に誓ひても忘るる君が心とぞ聞く（恋四・八六九）

忘らるゝ身をば思はず誓ひてし人の命の惜しくもある哉（恋四・八七〇・右近）

女を恨みて、さらにまうで来じと、誓ひて後に遣はしける

何せむに命をかけて誓ひけん生かばやと思ふ折も有けり（恋四・八七一・藤原実方）

右三首は神への誓約の歌になるが、実際の神は別であっても、この並びからは、いずれも八六九の住吉神と見ることが可能であろう。この三首は歌枕「住吉」を詠んでいると見なせるのである。

また、「涙川」を詠んだ三首に「涙」だけの歌が続いている箇所（八七五～八七八）があるが、ここの四首とも「涙川」の歌と見なせよう。そして、「涙川」が歌枕とされた可能性はなくもない。

男の伊勢の国へまかりけるに

君がゆく方に有りてふ涙川まづは袖にぞ流るべらなる（後撰集・離別・一三二七）

『八雲御抄』や『色葉和難集』では、この歌もあるので、「涙川」を伊勢国の歌枕としている。歌枕である蓋然性だけ指摘しておきたい。

色々と問題があるものの、恋歌における歌枕歌群の存在を確認した。これも『拾遺集』の試みであったと言えるのである。あるいは、『伊勢集』の影響も考えられるかもしれない。[7]『伊勢集』の成立は定説を見ないが、『拾遺集』成立の前後と考えられる。この『伊勢集』に、今日では古歌混入部分と把握されている歌群の前半が、歌枕を詠み込んだ歌群（三七九～四二九）であった。『拾遺集』成立頃には、伊勢はすでに伝説化された歌人であり、その形態は不明ながら伊勢の歌集は流布していたと思われる。現存本のありようから、『拾遺集』の頃にすでに古歌混入部分があったと推定できる。『拾遺集』の歌枕歌群は、『伊勢集』のそれに倣っていた可能性もあることであろう。

『伊勢集』とのかかわりはないとしても、『拾遺集』に恋歌の歌枕歌群があることは明確である。恋三に四季歌として詠まれた恋歌があったように、恋四では歌枕を詠み込んだ恋歌を配置したと思われるのである。

歌枕歌群は恋四の前半部になり、後半部には歌群の存在は見えにくい。しかし、歌語を重層的に連続される配置はここにもあり、その連続のまとまりを歌群とみることができる。一例だけ挙げておきたい。

思ふとていとこそ人に馴れざらめしかならひてぞ見ねば恋しき（恋四・九〇〇）

手枕の隙間の風も寒かりき身はならはしの物にぞ有ける（恋四・九〇一）

吹く風に雲のはたてはとどむともいかが頼まん人の心は（恋四・九〇二）

若草にとどめもあへぬ駒よりもなつけわびぬる人の心か（恋四・九〇三）

逢ふことのかた飼ひしたる陸奥のこまほしくのみ思ほゆる哉（恋四・九〇四）

陸奥の安達の原の白真弓心こはくも見ゆる君かな（恋四・九〇五）

右の五首は、「ならふ」「風」「とどむ」「人の心」「駒」「陸奥」という歌語が前後の歌と重層的に連続してまとまっていよう。これはまさに歌群である。そして、これらの歌は、「隔てそめ」があってのものと位置づけられるのである。

六　恋五―「思ひそめ」の後悔

恋部最後の恋五は、「絶望的な段階の恋」が主題であり、そのために「恋死」「つらし」「涙雨」「飽く」「恨み」「忘る」といった歌語で歌群をなしている。まさに絶望的な情況の歌々である。「…そめ」の形としては、「思ひそめ」を後悔するという形で使用されている。恋二にあった「寝そめ」を後悔したのと同じ発想になる。

紅の八しほの衣かくしあらば思ひそめずぞあるべかりける（恋五・九七五）

限なく思ひそめてし紅の人をあくにぞかへらざりける（恋五・九七八）

二首とも染料にかかわって「染め」となる用法になる。前者は「紅の、何度も漬け染めた衣のように、恋の思いに深く染まるのであれば、「思ひ初め」せず、染めずにいるべきであったのだ」と詠まれている。後者は「思ひ」に「緋」も掛けられている。歌は「限りなく緋に染めた紅色が、灰汁でも色が返らないように、果てしなく「思ひ初め」た人なので、飽くことなく心変わりしないのであった」となろう。こう思うのは、相手に飽きられているからで、自分は「思ひそめ」て以来、変わらないというのであろう。苦い思いがあるようである。

恋五の巻末、すなわち恋部の末は、次の歌になっている。

鹿島なる筑摩の神のつくぐと我が身一つに恋を積みつる（恋五・九九九）

この歌に対して、「しみじみと実ることのなかった恋を回想するという、巻の、あるいは部立の結論的な歌」[8]との見方がある。まさにその通りであろう。「思ひそめ」た時点から回想するということにもなろう。九七五にあった「思ひそめ」

後悔の用法は、恋部の収束にふさわしい指標となる歌語であったと言えよう。

おわりに

以上、恋の段階を提示する、多様な「…そめ」の用法から恋部の展開を跡付け、さらに多様な歌語を重層的に連続させて歌群を配置するありようを指摘してみた。後者は、恋部以外にも多く指摘できるので、さらに考えていくことにしたい。(9)

注

(1) 小町谷照彦「拾遺集恋歌の表現構造」(『国語と国文学』一九七〇・四)

(2) 増田繁夫『拾遺和歌集』(和歌文学大系、明治書院、二〇〇三・一)

(3) 「…そめ」の表現形式については、拙著『王朝の恋と別れ』(森話社、二〇一四・一一)の「Ⅰ　平安貴族の求婚事情」で扱ったが、ここで言及してない用例もある。

(4) 歌群については、次のような指摘がすでになされている。「『拾遺集』の和歌配列が、素材・歌題によってまとめ上げられた歌群を基本とし、その歌群と隣に位置する歌群との接続連続が(略)巧妙になされている」(片桐洋一「『拾遺集』の組織と成立―『拾遺抄』から『拾遺集』へ」『古今和歌集以後』笠間書院、二〇〇〇・一〇)。

(5) 小町谷照彦『拾遺和歌集』(新日本古典文学大系、岩波書店、一九九〇・一)

(6) 注(5)に同じ。

(7) 『伊勢集』については、秋山虔・小町谷照彦・倉田実『伊勢集全注釈』(角川書店、二〇一六・一一)を参照されたい。

(8) 注(5)に同じ。

(9) 『拾遺集』の四季歌の歌群については、拙稿「三代集の春歌巻頭歌群について―『拾遺和歌集』の位相―」(『大妻女子大学紀要―文系―』53、二〇二一・三)で扱った。